The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	特集にあたって : SHARED AUTHORITY : 歴史を描くのは誰か
Author(s)	安岡, 健一
Citation	日本学報. 2025, 43-44, p. 3-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/101367
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【特集】

特集にあたって

―SHARED AUTHORITY　―歴史を描くのは誰か――

安岡　健一

2024 年 8 月 24 日（土）、アメリカからオーラルヒストリーとパブリックヒストリーの代表的研究者の一人である、マイケル・フリッシュ氏を招へいし、国際シンポジウム「SHARED AUTHORITY　―歴史を描くのは誰か―」を開催した。本特集は、フリッシュ氏、および後半のセッションに登壇した菅豊氏、菊池信彦氏、石川良子氏、コメントの五月女賢司氏から寄せていただいた原稿を収録するものである。ここでは、企画の経緯とその主旨、筆者による補足を交えて特集の説明としたい。シンポジウム前に用意いただいていた原稿に加筆修正した原稿を提供してくれたフリッシュ氏ほか各位に心よりお礼申し上げる。

シンポジウムを主催した大阪大学グローバル日本学教育研究拠点では、筆者が代表を務めるかたちで拠点形成プロジェクト「オーラルヒストリー資料の保存・公開・活用に関する共同研究」を 2022 年度より進めてきた。本年度は 3 年間にわたるプロジェクトの最終年であり、それに併せた拠点全体の主催行事として、このシンポジウムは位置付けられた。開催にあたっては、共催団体として「国際日本研究コンソーシアム」から財政的支援を受けるとともに、日本オーラル・ヒストリー学会、パブリックヒストリー研究会から後援をいただいた。

フリッシュ氏の提起した、Shared Authority という概念は、これまでは日本語圏の研究であまりなじみがなかったが、近年の研究で受容され始めている。オーラルヒストリーの分野では、朴沙羅氏が「著者性」という面に焦点をあてた受容をしたほか、パブリック・ヒストリーの領域でも、菅氏による積極的な問題提起が進められており、本特集所収の原稿では、その現在地が示されている。

開催にあたって掲げた趣旨を、再掲しておきたい。

1990 年代以後は「記憶の時代」とも言われ、歴史的過去をめぐる国際的なコンフリクトが頻発している。それは同時に、歴史が持つ公的な意義への再認識がすすんだことを意味し、デジタル化を通じた歴史資料の共有と探求への市民参加は新たな可能性をも提供している。危機と機会の両面を有する現在において、歴史を誰が、いかに描くのかは、そもそも「私たち」とは誰かという問題と結びつく切実な主題であり、議論を積み重ねることが必要である。

実際、人文学・社会科学の分野において歴史叙述のあり方への反省を伴う潮流がいくつもうまれてきた。しかしながら、これらの潮流は、いままでの学術的な発展や蓄積の違いを反映して、必ず

しも有機的に結びついてきたとはいえない。そこで、今回の国際シンポジウムでは、SHARED AUTHORITY という概念を提起し、学問の変革を理論的に支えてきた研究者であるマイケル・フリッシュ氏を招へいする。これまで十分に翻訳されてこなかった、その実践の経緯と現在を紹介していただくと共に、日本側での実践を共有し応答を試みる。

具体的には、パブリック・ヒストリー研究、オーラルヒストリー研究、デジタル人文学の諸分野をそれぞれリードする研究者をお招きし、それぞれの歴史と現状についてのご発表をいただく。

2002 年に設立され、結成 20 年を迎えた日本オーラル・ヒストリー学会から現会長である石川良子氏（立教大学）に登壇いただく。日本におけるパブリックヒストリーについて、2019 年に発足したパブリックヒストリー研究会の呼びかけ人である菅豊氏(東京大学)にご登壇いただく。また、デジタル人文学の分野から、菊池信彦氏(国文学研究資料館)にご報告をいただく。

また、コメンテーターとして、五月女賢司氏にご登壇いただき、議論の射程を広げたい。

本シンポジウムを通じて、広い意味での関係者が出会い、他国の実例に学びながらより創造的な関係を構築し、次代の人文学・社会科学の発展を展望したい。

フリッシュ氏が前回来日した 2001 年には、日本にオーラルヒストリー学会はまだなかった。2003 年の日本オーラル・ヒストリー学会の設立当時、それは東アジアではじめてのことだった。その後、アジアの多くの国々でオーラルヒストリーの専門学会やアーカイブズが生まれている。各地のオーラルヒストリー研究と実践は、デジタル化の潮流を踏まえ、大きく広がっていると言える。

この数年、生成 AI の普及による文字おこし技術の向上は著しいものがあるが、生成 AI の普及の以前から、デジタル化によって音声や動画を共有することも容易になり、元の音声から、リズムや感情など、語りの持つ豊かな要素に触れなおすことができるようになった。フリッシュ氏は 20 年前の論文で、デジタル技術がオーラルヒストリーに口述性、つまりオラリティを取り戻すこと、そこで「索引」が持つ重要性を指摘した先駆者である。今回の講演は、このデジタル化の第一段階と、生成 AI の発展によって開かれつつある現在の第二段階を結び付ける貴重な内容だったといえる。しかし、日本では、この技術的な発展によって可能になったことと、オーラルヒストリー資料の保存・活用やデータ管理がいままでのところ上手く連動しているとはいえず、今後の大きな課題である。菊池氏によって提示された、デジタル化のさまざまな実例は専門家と非専門家の協力する可能性を示した。オーラルヒストリーでは今後どのような応用が可能になるだろうか。

今回のフリッシュ氏の講演では、生成 AI をめぐっては特にインデックスと文字起こしに焦点があてられた。しかし、オーラルヒストリーのライフサイクルに示されているように、オーラルヒストリーにはいくつものステージがある。最近では、生成 AI をオーラルヒストリーに応用する動きはますます幅を広げている。例えば、語りの収集に AI を応用しようとする研究や、これまでに得られた語りから AI で語りを生成する動きである。

日本での一例をあげると、日本赤十字社によるプロジェクトは社会的な話題となった。関東大震災 100 周年に併せて企画された展示のなかで、被災した人の書き残した多数の証言を読み込ませ

て、架空の証言を作成したことが批判を呼び、証言の展示が中止された出来事は記憶に新しい。ここでAIにより生成された語り（AI-generated narrative）に、少なくない人が否定的な反応を示したのはなぜだろうか。ここに、聞き取りにおける譲り渡せない何かが存在したのではないだろうか。生成AIが代替できる部分と、できない／してはいけない部分との区別をどう考えるかにあたっても、Shared Authorityをめぐる議論は手がかりをくれそうだ。石川良子氏の議論は、オーラルヒストリーの実践をめぐって不可欠な、聞き手と語り手との関係性に注目を促すものであった。

いま、聞くことに関心を持つ人の裾野は日本の各地に広がっている。たとえば医療や介護、福祉の領域で認知症や孤独・孤立の問題等に向き合う方途として自らの過去を語ってもらうことの意義が見直されていることをあげたい。オーラルヒストリーは多くの学問分野や社会活動、芸術活動をつなぎ合わせる可能性を持っている。

Shared Authority は目的地というより出発点であるというフリッシュ氏の指摘をあらためて思い出したい。その指し示した論点は、現代の日本における学問のあり方を問い直すうえでも、日本研究を国際的な議論と接続するうえでも、極めて有益であり続けているだろう。

フリッシュ氏はこれまで、繰り返し“Sensibility”について語ってきた。感性の果たす役割を腑分けし、実践してきた歴史学者が、今も新しいチャレンジを続けていることは、非常に啓発的だ。かろうじて聞き取り記録することができた一つ一つの語りは、断片的なモザイクの破片かもしれない。しかし、それをまとめ、つなげることで違う図像が見えてくる可能性を信じてしぶとくつながっていきたい。

【参考文献】

【和文】

朴沙羅『記憶を語る、歴史を書く』有斐閣、2023年

安岡健一，中村春菜，澤岻大佑，福山樹里「「語り」を残し、使うために：沖縄・久場崎の戦後引揚プロジェクトを事例に」『日本オーラル・ヒストリー研究』18号、2022年

【欧文】

Frisch, Michael (2006) ‘Oral History and the Digital Revolution: Toward a Post-documentary Sensibility’, Robert Perks and Alistair Thomson eds.　“The Oral History Reader” 2nd edition.